

薬草園の花だより

第33号(最終号)

2022年(令和4年)2月23日発行

■第33号(最終号)に寄せて

私は薬用植物学は「薬学の母」と思っていますが、近年は薬学という科学そのものが変化してしまったのか、薬学における薬用植物に対する興味や力の入れ方がかなり薄れてきたのではないかと危惧しています。植物好きな薬学専門家が漸減してしまったのでしょうか。実は有機化合物の名前には植物の学名などを基としたものは多く、植物に親しむと医薬品に使われるような化合物の名前も容易に頭に入ることが多いので、このことはとても残念なことと思っています。

さて、私が日本薬科大学の薬用植物園の園長としてその運営に関わることになった際、なんとか皆様に薬用植物に親しんでいただきたいと思い、『薬草園の花だより』を刊行することにしました。その創刊号の刊行は2017年6月19日。サイズは毎号、A4判両面印刷で1枚と決めました。

それ以前に図書館長を務めていた際には同様な形で『図書館だより』を隔月刊行していましたが、『薬草園の花だより』は不定期の刊行としました。それは、植物という生き物を扱うために、その開花期や成長の度合いに合わせるためには定期刊行は向かないかなと思ったからです。そこで、人間が作り出した暦に刊行を合わせるのではなく、草花の様子に刊行を合わせるという手法をとってみようと思いました。この手法は、春～初夏の花の多い時期と晩秋～冬の花の少ない時期の刊行数を自由に変えられる点ではうまくいきました。ただ、定期刊行の手法にもその味わいがあるとも改めて感じました。

以上の考えから『薬草園の花だより』を随時刊行し続けてまいりましたが、このたび、私の園長退任により、私が編集執筆するものとしては勝手ながらこの号をもって〈最終号〉とさせていただきますこととなりました。なお、既刊の創刊号から、この号までのバックナンバーは、大学のHPの薬用植物園のコーナーから閲覧できるようになっています。

私はもともと医療や薬に興味があって薬学の道に進んだわけではなく、植物が好きで薬学に入り込んだのですが、薬学に進んだことは大正解でした。この機会にその訳を少々、お話ししておきたいと思います。私の場合、植物は好きですが、実は、その興味の範囲は、一般に考えられる、良質な花の生産や、病気の予防、作物の生産、優秀な種への改良、新種の発見、植物の生理などにはありませんでした。もちろん、これらの領域もとても重要であることは自明のことですが、私の植物への興味は少し違っていて、植物の文化的な側面にあったのです。そうすると、私の植物との付き合い方は、農学部や理学部のそれではなく、薬学部において植物と付き合うのが最適でした。このことは大変に幸運でした。

植物と人間の関わりとなると、大まかに衣食住に関わる面の他、薬や毒の材料としての

関わりがあります。後者の面から植物を眺めるとなると植物の文化的な側面が強く、それが叶うのはまさに薬学の分野です。どうやら私は自分の興味にドンピシャの分野に足を入れたことになったようです。東北大学薬学部・同大学大学院薬学研究科での学び、そして、3年間のシカゴ留学(イリノイ大学)の修行時代はもとより、その後、今日に至るまで薬用植物に関する新知識を見出したり、取り入れたりすることがずっと楽しくてなり

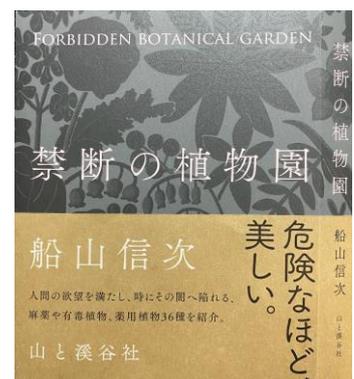
ません。そして、ひょんな動機で入り込んだ薬学でしたが、薬学が大好きになって今日に至ります。そのような中で、いつしか「毒の専門家」などとも称されることになったことからその関係の本の執筆も多くなりましたが、日本薬科大学にて薬用植物園に関係することになってから、『毒草・薬草事典』(サイエンス・アイ新書)、さらに、『禁断の植物園』(山と溪谷社)などをまとめることができたのは望外の幸せでした。前者の本では本学の薬用植物園にて撮影した写真を多用、また、後者では、図版は主にイラストレーターによる洒落たものに委ね、もっぱら本文を「禁断の植物園園長」として執筆しています。こちらの刊行は本年3月2日ですが、すでにアマゾンなどでの予約申し込みは開始されているようです。

園長は、今後とも、薬用植物に関する原稿の執筆をはじめ、インターネットや講演会、放送番組関係などの様々な方法を通じて「薬用植物の語り部」としての活動を続けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(日本薬科大学薬用植物園長/船山信次)



『毒草・薬草事典』
(サイエンス・アイ新書)



『禁断の植物園』

■今咲いています・見頃です

冒頭の文にも書きましたが、この時期は適当な薬用植物の花がなかなか見つからない時期です。温室にて咲いている花はありますものの、本学の温室のこの時期の花々は、これまでの『薬草園の花だより』にてほぼ取り上げ尽くしました。

この厳寒の時期に使われる言葉として「厳寒の三友」あるいは「歳寒の三友」というものがあります。そして、それらは、「松・竹・梅」あるいは「梅・水仙・竹」とされます。いずれもこの時期に元気よく緑を保っている植物です。

そこで、今回は、「歳寒の三友」の水仙に関連するスノードロップの仲間と、この時期には球根として寒さを乗り越えようとしているイヌサフランの仲間のグロリオサ（ユリグルマ）を取り上げることにしましょう。

《スノードロップ》

圃場にてスノードロップ (*Galanthus nivalis*) が可愛らしい花を付けています。アルツハイマー型認知症の治療に応用されているガラントミン (galantamine) などの有毒ヒガンバナ科アルカロイドを含みます。もう少し経つとこのスノードロップを大きくしたような姿で、同じヒガンバナ科に属するスノーフレーク (*Leucojum aestivum*) も咲き始めますが、こちらはまだ芽を出したばかり。



スノードロップ

ヒガンバナ科の有毒植物といえばスイセンの仲間も挙げられますが、圃場ではニホンスイセンの仲間が咲き始めました。また、秋に真紅の美しい花を付けていたヒガンバナの葉が勢いよく生い茂っています。この葉は晩春になると消えて休眠に入ります。毎年、ニラと間違えてスイセンの葉を食べてしまう中毒事件が起きています。しかし、だからと言って私たちは庭からスイセンの仲間を駆逐したりしません。私たちはうまく有毒植物と共存しているのです。

なお、スイセンの仲間には厳寒のこの時期に咲く上述の日本水仙のようなものもあれば春爛漫となってから大型の花を咲かすものもあり、多くの種類を植え付けると結構長く楽しめます。

《グロリオサ》

昨年美しい花をたくさん付けていたグロリオサ (ユリグルマ / *Gloriosa rothschildiana*) の地上部がすっかりなくなり、球根だけとなっています。第15号でも触れましたが、どう勘違いしてしまったのか、この球根をヤマノイモと間違えてすり下ろしたものを食べて中毒した例が複数あります。その有毒主成分はコルヒチン (colchiine) です。コルヒチンの原料植物としては、第5号で紹介したイヌサフラン (コルチカム / *Colchicum autumnale*) が知られています。両者とも同じイヌサフラン科の植物ですが、草姿は全く異なります。

コルヒチンは専門家の監督のもとに通風の治療に応用されることがありますが、毒性の高いアルカロイドです。ここにグロリオサの球根の写真を示しますが、表面はつるんとした感じで、擦り下ろすと大根おろしのようになります。また、折るとパキッという感じで折れ、ヤマノイモのように糸を引くようなことはありません。コルヒチンによる中毒は場合によっては命に関わりますので厳重な注意が必要です。



グロリオサの球根



グロリオサの花



イヌサフランの花

■薬用植物園からのお知らせ

《皆様の長い間の御高覧、そして野本さん、御尽力本当にありがとうございます》

植物園の園長になるのは子供の頃からの夢のひとつでしたので、この薬用植物園長という立場は大いに楽しんで関わらせていただきました。大感謝です。また、薬用植物園を運営するにあたっては優秀な、圃場の管理・植物の管理栽培の専門家の存在は不可欠ですが、私が園長をしていた期間を通して野本さんがパートナーとしてずっとこの仕事に携わってくださったことはとてもありがたいことでした。野本さんは、女性の細やかな視点も加味しながら薬用植物園の仕事にとっても熱心にあたってこられました。時には Y.N. のイニシャル付きにて、撮影された写真を『薬草園の花だより』に使わせていただいたこともあります。そして、ロビーには、「今、薬用植物園で咲いている植物の写真」の展示も続けてくださっています。薬用植物園を今日のように良く整備された状態に成長させてくださったその御尽力に厚く御礼申し上げます。

そして、読者の皆様、長い間の、この『薬草園の花だより』の御高覧、まことにありがとうございました。今回の刊行をもって、『薬草園の花だより』はひとまず最終号となります。それでは皆様「御機嫌よう」(S.F.)。

発行：日本薬科大学薬用植物園